七　商業政策と商權の消長

（改定經濟學研究　第二篇九）

商業政策と商權の消長

私は『商業政策と商權の消長』といふ題で一席の講話を致します。學問上どう云ふ風に學者が此問題を說きどう云ふ風に此問題が學問上今日研究されるかといふことの概略を述べやうと思ふ。兎角經濟上の問題は極く素人解りが早い、併し未熟な少年が新聞を讀んだ斗りで、忽ちにして日本國家の經濟の前途を如何せんとか、或は日本商業立國策とかいふものを論ずるといふのは、兎角あるところの現象であります。私は天下に起るところの問題について、さう放膽的に經綸の大策を無暗に振り廻されては溜つたものではないといふことを斷言する。何故となれば、經濟の問題は一見素人に甚だ解り易いけれども、又た經濟の問題程……それは固より混雜したる問題も他に澤山ありますけれども……眞相を窮めることの六つかしいものは少ない。言葉を換えて言へば、經濟の問題

F. VI, 139.

程嚴密に公平に少しも利害に制せられ或は感情に驅らるゝことの無い冷かな頭腦を以て解釋を要する問題は其の類甚だ少いことであらうと思ひます。そこで今私が茲に掲げた『商業政策と商權の消長』といふやうな問題に就て、極くじみな極く落付いた冷な眼と頭とを以て解釋を致さうと思ふ。

抑も此商業政策といふ事は、唯そればかりの考で分るもので無く、又そればかりで以てひとりで働くものではない。一般の國民經濟政策農業政策工業政策交通政策並に色々政治上社會上の政策といふものと、手に手を執り合ふて効を奏し、亦初て本當の職務を充たすことが出來るものである。先づ商業政策を分ちて內國商業政策と外國或は對外商業政策とします。內外商業政策といふ時は恰も一つの物を裏と表から見た樣であるが、其實甚ださうでない。內國商業政策といふのは、是は學問上の言葉を以て言へば、交換或は交通の政策である。經濟の中に交通に關する現象に關係した政策である。所が對外商業政策といふものは夫と丸で違つて交通政策或は交換の政策で無くて、生產の政策です。經濟の現象中生產といふものに關する現象を支配する政策です。內國の商業政策はどう云ふことを重もな問題として研究するかといふと、一番先きに來るのが商業經營の形態に關する問題、詰り大商業、小商業、卸賣、小賣此頃西洋にやかましい日本の勸工場見た樣な大經營の小賣商業或は露店、負商或は行商、或は商事會社、取引所といふ樣な色々な形を取つた商業的動作が行はれて居ります。日本ならば日本、英吉利ならば英吉利、亞米利加ならば亞米利加でどう云ふ風な經營を奬勵して宜いか、どう云ふ風な經營形態は之を拋つて置くべきか、どう云ふ風な經營形態は寧ろ禁止して宜いものであるかといふやうな大變に複雜した問題が澤山あります。日本にはさう云ふ問題は起つて居るでせうけれ共、未だ深くそこに意を留めるものが無いやうであるが、西洋の國々で見るといふと、內國商業の經營形態に關する問題の錯雜したものは、學術上研究を要します。第二には同じ商業經營の形態ではあるが、其の中競り市や取引所といふやうなのは多人數が集つて一定の時を限り一定の處を限つて商業取引をするといふ經營法がある、或は又夫れに類似したものはどう云ふ風に政府がそれに向つて行つて宜いか、どう云ふ風に一個人としてそれに向つて宜いか、一體國民經濟のどう云ふ考から之を監督し或は保護し或は奬勵して

行くかといふのが第二の問題。內國商業政策の第三の問題は、商業界に於ける社會問題といふものであらう。實際商業界に社會問題があります、又有り得ることは無論であります。何故なれば、商業を營む人間なるものはどう言ふ人間で成立つか、人を雇ふといふ人もあるけれ共、之れに對して雇はれる人が澤山なければならぬ。無論工業に於ける程は商業上の勞働に從事する人數は澤山は無いに相違ないけれ共同じく勞働者であります。卽ち商業使用人手代丁稚或は小僧、是等の社會上の狀態といふものは、何時までも必ずしも滿足して居るべきもので無いのみならず非常な不滿足なことが澤山ある。一番商業の生活隨つて商業の經營法が進んで居る所、卽亞米利加でも英國でも獨逸でも其他佛蘭西、伊太利等又日本のやうな新らしく西洋風に營む國でも、商業界に社會的問題の無いところは無い。現に日本の丁稚の狀態などは隨分我々が研究を要する問題だらうと思ひます、之れを研究するのが內國商業政策の第三の職分であらうと思ふ、所がそれと關聯して商業教育の問題が第四である。何故商業教育が內國商業政策の第四の問題であるか、抑も一國の經濟の土臺は資力なり土地なり其の他色々なことがあるけれども、經濟をやるのは誰がやるか、人間がやる、どうしても商賣をやるには其商業の衝に當る人或は局部に當る人が要る、それで唯だ拋つて置いて出來るものではない。日本は昔しは商業教育が無かつたと思ふのは大間違ひで、又或人の樣に英國に商業教育無しと言ふのも亦間違つて居る。必ずしも學校へ行つて字を書いたり、算盤を彈いたり、法律を學ぶとか、簿記を附けるとかいふのが商業教育では無い、詰り商人となる教育法であるから、學校に於てすると商店に於てすると何處に於てするとは決して問ふ所では無い、詰りどう云ふ風にして未來の商業界に働くところの大將となり、中將となり、少將となり、或は兵士となり、曹長となり、或は砲兵となり、工兵となるといふ人間が育てられて、どう云ふ方面からさう云ふ人間が來るかといふことは商業教育の問題である。其外少さな問題は內國商業政策に澤山ありますけれ共、此四つを以て私は一番肝要な問題であると思ふ。

此內國商業政策と正反對なる地位に立つのが對外商業政策、若くは外國貿易策と言つても宜しうございませう。是は今言つたやうな交換若くは交通政策で無くて生產政策の方であります。何故といふと、內國の商業政策は內國で商人が商賣を營んで居り營ん

で來るといふやうなことで、それに對して國家なり、私人團體なり、私人一箇なりがどう云ふ考を持つて居るかといふことを究むる丈で、それを保護すると云ふよりも實際監督し、監視するといふ方が主たる眼目であります。所が對外商業政策はさうで無い。日本と云ひ、英吉利と云ひ、亞米利加と云ひ、獨逸と云ひ、伊太利と云ひ、露西亞と云ひ、國を成して居る、其中日本と外國との貿易といふものがあり、英吉利と外國との貿易といふものもある、其貿易といふものは詰り商業といふ一つのことであるけれ共、之を全體から言つて見ると、日本の全體の國民經濟といふものが、外に對する活動の總稱に外ならぬ。詰り日本が世界の市場に對して物を賣るといふのは、日本の農業、工業、漁業、牧畜業、其他鑛山業なり、何なり、あらゆる日本の經濟的働作が色々ある結果、此日本といふ關門を出て外國へ行く、だから外國に對する商業政策の問題といふのは啻に商業丈けの問題では無い。內國の商業政策は內國の商業丈けのことであつて、農業者、工業者、其他の生產業者に一樣に關係する重大な問題では無い。所が外國に對する商業といふことになると、寧ろ一般の國民經濟問題で而して生產政策に屬するのであります。

從來の經濟學の說き方に依ると、國といふものは眼中にない、東京から大阪に物を賣るのも、ロンドンに賣るのも、ニューヨークへ賣るのも、同じ原則に依つて支配される、成程彼人間も同じ人間である、支那人でも露西亞人でも朝鮮人でも、抑も商賣をする、經濟の行爲に從事する時には悉く同じ考を持ち、同じ條件中に同じことを含んで居るとしたものであります。だから特に對外の商業政策などといふことをやる必要も無ければ、亦從つて學問上から研究する必要が無い。無いからいふてなかつた。夫で日本などでは、此商業政策の研究はさう盛んで無い。さういふ風から言つて見ると、商業政策などを擔ぎ出して騷ぐのは閑人の隱居仕事で、國家は國家自身で夫れ丈けの職分をやつて居れば宜い、商人は商人で、蠶の蟲が桑を喰つて大きくなつて、糸を拵える如く銘々やつて居る、唯だ餘處から蟲が來て蠶を喰つたりなにかせぬ樣にすれば宜いといふのが、從來のやり方でありました。經濟學者の看板を打つた連中は、此の如く商業政策などは眼中に置かないで拋つて置けば漸々に育つ、觸らぬ神に祟り無し、成る可く野育ちに育てゝ置くといふ簡單な、極く手短かな容易なものと自らも確信し、夫れに基いて議論を立てゝ居つた。であるか

ら今日から見ると殆んど桃源の夢を結んで居つたと言つて宜い。極めて架空、極めて未熟な抽象的の考を以て晏然滿足して居つた。今日でも勿論此の類の架空論もあり、空論家もある。所が實際果してどうなつて居るかといふと、學者が晝寢をして居る間に、世界はどし〳〵進歩する、學者が何と云つても進歩する、又生活の進歩は止め樣と云つても、學者一個の理想で止る者で無い。實際今日の世界の商賣上實際の關係經濟上の觀念はどうなつて居るかといふと、決して東京から大阪へ物を賣るのと、東京からニューヨークへ物を賣るのと同じ次第では無い。東京から支那へ物を賣るのと、露西亞へ賣るのとは違ふ。同じ露西亞でもペートルスブルグへ賣るのとウラヂオストツクへ賣るのとは違ふ。又亞米利加にしてもニューヨークへ賣るとヴアンクーヴアーへ賣るとは事態を異にして居る。何故といふと、日本から支那へ送つて支那の海關稅を拂ふ率と、露西亞へ行つて露西亞の海關稅の率とは違ふ、又露西亞の海關稅の率で英吉利へ行く時にはどうなるか、大抵な者は稅を拂はない、今度獨逸へ行けば隨分高い稅を課せられる。亞米利加へ行けば眼から火の出る樣な稅を課せられる、皆悉く關稅々率も違つて居る。其上或物は許されて或物は許されて居らぬ。例へば煙草は獨逸に於ては許されて居るが佛蘭西に於ては許されて居らぬ。英吉利でも煙草を國內に植えることは禁じて居る。諸君、各人各個が勝手に蠶が絲を繰るやうにやつて居る者ならば、何故各國がさういふ者を禁ずるか、是は商業政策計りから來たのでは無いが、一例として言へば、さういふやうに決して簡單に行つて居る者で無いといふことが分るだらうと思ひます。そこで今日はどうなつて居るかといふと、世界各國文明各國皆鎬を削つて少しでも人の國より餘計生產高を殖やす、販路を餘計我物にすることばかり考へて居る。其結果が亞弗利加の戰爭或は支那に於ける衝突、或は波斯に於ける衝突、其他色々の現象は諸君が皆知つて居る通りであります。即ち實際上より戰爭の原因を洗つて見ると、政治上の紛紜とか、或は人種上の憎しみもありますけれ共、經濟上の衝突程强い戰爭の原因は無い。古今東西の歷史を繙くと何時もさう云ふ戰爭であります。今日起つて居る實際の戰爭でも、英吉利がトランスヴアールを引繰返すのでも、亞米利加が西班牙を仆すのでもフアショダ事件でも皆んな其中に這入る。或は各國が掛つて居る土耳其の問題の如きも、露西亞が無暗に手を伸ばすといふ

のは政治上或は兵事上の考ばかりでは無い、モツトそれより强いフアクトルといふ者は經濟上の利害問題である。歐洲各國は盛に工業を發達してドシ〳〵拵えて四方に賣つて居る、自國で賣る丈けでは到底食物を充たすことは出來ない。工業國は工業品を喰ふて生きて居るものでは無い、何處かに機械を賣らねばならぬ。例へば英吉利で製造する着物は英吉利ではさう〳〵着れない、英吉利で使ひ切れる位なものを拵えては餘處の穀物牛肉を取ることも出來ない。英吉利には實際穀物はたんと出來ない肉は澤山出來ない。さうすると英吉利人は詰り機械を澤山持つて餓死せねばならぬ。それではならぬから、英吉利で拵えた機械なり、鐵道線路なり、綿絲なり、織物なり、餘處の國に賣らねばならぬ。餘處の國に賣らうと言つても自分の國ばかりが賣手ならば宜いが、獨逸亞米利加佛蘭西諸國の競爭が多いから、隨つて成る可く他より良い物を廉く賣らうとし、なる可く他の物を逐い退けて、自分の國の販路を擴めやうといふことに汲々として居る。であるから、今日の歐羅巴文明國がやつて居ることを總括して云へば、詰り御客さまを殖さうと思つて骨折つて、それが爲に戰爭も辭さなければ色々なことをやつて居る。商業の發達は戰爭を不可能ならしめると云ふのは愚論である。政治上の事件として起つて居るゴタ〳〵も、其の眼を以て見ると初て本當の解釋が附くことが多い。さういふ樣な現象が今日起つて居る、是等の現象は何を證據立てるかと言ふと、先づ其商業政策といふものを少しも知らない關係ない閑人の隱居仕事、或は婆さまの世話を燒くの丶眞似であると思つて居た人々の誤つて居るといふことを證明する外はない。曾て獨逸の或有名な政治家が本を書いて、其本に名を附けて、世界三大國論と言つた、其中の說に世界の利害が段々衝突する結果、三つ大きな國が出來る、其三つが世界を併呑する、隨分さう云ふ考で本を書く人が西洋人の中にはあります。千八百八十一年ペーツと云ふ墺太利人が亞米利加へ行つて、亞米利加の經濟上の實況を見て、亞米利加が歐羅巴に及ぼす經濟上競爭の結果はどうなるかといふことを學問の上から研究して本を書いた。其結論に先生嘆聲を發して曰く、世界といふものは詰り四ツか五ツの大國に分れて仕舞ふ。それは英吉利と亞米利加と支那と佛蘭西であるだらう、惜しいかな、己の本國たる獨逸と墺太利は其の數に這入らないといふことを言つたのが、未だ千八百八十一年であります。所が今日どうか、先生が云

ふた五大強國の一たる佛蘭西といふものは、最早右の勘定に入れるのを相談をしない位、支那は無論今日世界の強國といふ人は無い。此如く數年の間にすら色々の所謂コンステラチオン」といふものが變つて來る、此「コンステラチオン」の變つて來るのを名けて商權の消長といふて置きませう。政治上の權力ぢやない、商業上の覇を握るのである。其國の覇を握るといふのは、政治上の優勢、其政治上の優勢の或は伸び或は縮むといふことは抑々何處に原因して居るかといふ問は啻に學者ばかりでなく、苟くも國のことを考へて居る人々の頭には必ず起つて來る問題であります。さういふ研究をして斯ういふことを言つた人があります、『總ての文明國民の政治史を研究して、最も我を感嘆せしめたことは是である、國民の日常の職業國家的日常の經濟上の働作といふものが、政治上の組織といふものに一番有力な影響を殘す者である』と（史家ヒュルマンの言）。之を他の言葉で言つて見ると、詰り一國の政治上の組織、一國々内の政治上の權力と其世界に於ける政治上の權力の消長といふものは、悉く經濟上の原因が其基になつて來て居る。無論他の原因もあるに相違ないが、一番有力なのは經濟上の原因である。經濟上の富の配分は、一國々民内に於ける政治上の權力の配分を支配する。日本では富は大部分百姓の手にあるから、百姓が政治上一番權力を持つて居る。隨つて衆議院に餘計議員を出し隨つて百姓の言ふことは多く通る。英吉利に行くとそれがアベコベで百姓のいふことは通らぬで、工業者商業者のいふことが通るといふことは明かに證明し得るのみならず、其の國内の經濟上の組織如何といふものは、同時に世界の政治の系統内に於ける其の國の政治上の地位を定める。即ち一國の經濟上の狀態組織といふものは同時に世界の政治組織内に於ける其の國の地位を定めるといふことは、歴史が我々に明白に教える現象である、理屈ぢや無い明かに疑ふ可からざる現象であります。例へば今日英吉利が一番富んだ國であると同時に一番強い國である、夫に次いで亞米利加がある、夫に次いで獨逸佛蘭西、墺太利といふやうに來て居る、併ながら夫等は決して偶然に湧いたのでは無い、幾千年掛つた歴史上の進歩、發達の結果であります。日本が今日斯ういふ狀態に達したのも、二千何百年の結果で、支那の今日の狀態も無論發展の結果であります。今日少しもない現象が昔しは澤山あつた。今日我々が見て居る總ての現象は、其の元を遠く歴史に溯つて考

へて見なければ分らぬ。何故英吉利が今日世界で一番富んだ國であるか、何故亞米利加が強い國で富んだ國であるか、何故伊太利、西班牙が段々衰へて行くかといふことは無暗に議論をした所が追付かない、それは明かにチヤンと歴史の上に載つて居る。それを極く短い所に約めて諸君に御話して、商業政策といふものと商權の消長、即ち一國政治上の權力の消長といふものに極めて密接な關係があるといふことを明にして、其の政策の研究が極めて必要であることを諸君の腦裡に印したいと思ふのであります。

今日歐羅巴の文明の根源になつて居る者が二つある、それは一つは希臘と羅馬の文明である、他の一は獨逸人の天賦の自由の野性或は野蠻性此の二つのものが今日歐羅巴の文明を拵えて居る。羅馬は世界を包含して大きな帝國を拵えたがこれが一朝がらりと潰れた。潰れたけれ共、併し羅馬が覇權を及ぼし、羅馬が其の兵隊を送り、役人を送つたところには、如何に滅びたとは云へ如何に沒落したとは云へ、尙幾分か羅馬の文明、希臘の文明の遺物を存して居た。其の遺物の中で重なるものは第一非常に工業の技術が發達して居たこと、第二には貨幣經濟の既に成立て居たこと、第三は各人の平等自由なる契約を基とするところの法律即ち羅馬法のあつたこと、此三つのものは羅馬の文明が及べば及ぶ丈けそれ丈け及んで居るのであります。其反對に羅馬の文明の行かないところには全く是は無かつたのである。例へば今日の獨逸の如き、ダニューブ河の北の獨逸の如き、羅馬は役人も送らぬ、兵隊も送らぬ、隨て羅馬の文明が茲に多く及んで居らない。隨て以上三條件の如きは、奚にしたくも無い。所が伊太利、西班牙、佛蘭西の如き羅馬の文明の波を被つた。其の時には世界に羅馬の文明が及んだ度の强弱に依つて、是等の遺物が或は多くの度に於て、或は少い度に於て存したが、此三つの要件といふものは一番肝要なものでは無い、羅馬の文明がのこした一番肝要なものは、此三つを要件として其上に築いたものが一つある。それは何であるか、一國内をスツカリ統一綜合して、其上に一つの頭を置いた所謂中央集權といふものである。此中央集權といふものは貨幣經濟を土臺として非常に發達したものであります。工業の技術も要件として必要であり又羅馬法といふものも必要である。中央集權の法律と封建時代の法律は合はぬ、中央集權には中央集權の法律で無ければならぬ、それは即ち羅馬法である。それで前に言つた羅馬文明の特産

物遺物といふものは、詰り此一つの中央集權の政府といふものに示されてある。所が獨逸民族が羅馬へ押込んで羅馬を倒して、羅馬の成立ばかりでは無い羅馬の文明も倒された。夫に代つたものは獨逸人即ちチユートン人種である。其の人間が羅馬に來て羅馬の文明を見、さうして夫を倒した。其の倒された文明が成程其の時は倒されましたけれ共、勝たれた方が勝つた方の人心に影響を及ぼして、チユートン人と羅馬人の文明的遺物と合體し、茲に一の新らしい文明が出來たのである。所が此羅馬へ侵入したゲルマン人はどういふ樣な生活をして居つたかと云ふに、羅馬人と違つて、自由契約の考もなければ、羅馬法の如く込入つた極く發達した法律上の考を持つては居らぬ。人と人とを結び附けて社會の團體を形成するものは、人と人との間に信義を重んじ、家來が主人の恩義に感じて夫が爲に身を殺すを顧みず、主人も亦家來とした以上は敵に對して保護してやるといふ所謂主從的關係といふ簡單な道義上の感情の上に、一つの民族といふものが總ての社會を組立て居る。羅馬法とか或は貨幣經濟とか、其の他工業の發達したものゝ代りを、此一片の意氣投合的の感情がなしたと同時に、中央集權などは無論無く、地方分權で各所に分立して居つた。所が此野蠻的のゲルマン人が羅馬へ這入つてそうして向ふの文明を見た其時羅馬の文明は既に熟し、熟して遂に又熟すれば必ず腐敗する、其腐敗したのを壞はして、更に其中から健全な分子を取つて、あとの腐敗したものを捨てゝ仕舞つて、それを復活せしむる力がある。他方には極く野蠻であつたチユートン人が文明開化の眞似形をした。歐洲のアルプス山から北の諸國が希臘羅馬の文明に侵染されて居る度の多い丈け遺物が多いといふことは前に申したが、其遺物を全く無くして仕舞はないで、更らにチユートン人が天下を席卷した後は、其内の健全の部分を更に發達し進歩せしめた。其の遺物を更に發育せしめた國が榮え、其國が歐洲の政權を握る。詰り歐洲の中原の鹿を捕ふるやうになつた。是が即ち歐洲の政權の消長の大淵源であります。其れと同時に、それが其國の商權を支配したのです。其が第二の商權です、どういふ國が商權即ち商業上優勢を占むるやうに發達し、其地位を利用して、商業上の優勢國になつたか、どういふことが其の國の世界の政權を握つたか、握らなかつたかといふことが極まる。言葉を換へて申せば、第一に羅馬の文明をどの位採つたか、第二に其の國の世界の商業に於ける關

F. VI, 140.

係位付が如何であつたか、此二の條件が、歐洲各國を廻り燈籠のやうに上に出で、下に出で、上に出で、下に出でしめ、舞臺の局面を變遷せしめた原因であるのです。

そこで其の二つを引括めてこゝに伊太利語でリナッシアメント、佛語ルネーサンス即ち再生と申します。一旦死んだ文明が再生したといふことであります。此ルネーサンスが一番發達した極點が、統一的國家の形成となつて顯はれました。統一的國家を作るといふことは、國の經濟組織が飛び上がつて、嘗て夢想だもせなかつた新經濟組織、即ち所謂國民經濟といふものを發生したといふを云ひます。そこで羅馬の文明の遺物に依つて、再び國を復興させるに方つては、獨逸民族の勢力即ち農業的野蠻の壓力が少ければ少い程早く芽を開いて來たのであります。これは極く當り前のことである、此の獨逸人の勢力、蠻力の一番少かつたところは伊太利である、殊に伊太利の南部である。伊太利の南部には獨逸民族の勢力は絶無であつた、北部にはロンゴバルテン人が居つたが南部には無い。當時伊太利の勢力地位を形容して、伊太利を若し長靴と喩えれば、其の中に這入つた獨逸民族は恰も靴の中の足の如きものである。周圍外面は元の羅馬の文明が遺つて居る、内に這入つて居る足が獨逸人だ。所が此足たるや極く短い足で、先きの方は南部に及んで居ない。羅馬から南に及んで居ない。殊にシチリア島に至つては殆んど獨逸人の勢力が皆無である。だからそこで羅馬の文明が再び芽を開くことの一番早いは無理ならぬことである。南の伊太利、マグナグレチアあたりの殖民地近傍、丼にシチリアで一番早く近世的發達が出來た。其の發達とは前に言つたやうな貨幣經濟に基く中央集權政府が出來た或は工業學術が進歩したが、一番肝要なものは、其國の地方分權、諸侯の力を倒して強い中央集權を確定したことである。

同時に都市といふものが非常に發達したことである。即ち都市の發達、都市經濟の發達の順序、是は他の事に屬しますが、一番始が自足經濟、其次が都市經濟、其の次が領域經濟、其の次が國民經濟といふ風に學者が分つたが其の中第二の都市經濟が發達した。それまでは家屬經濟ばかりであつたが、南伊太利シチリアでは都市が發達し都市經濟が發達した。又他方では、羅馬的中央集權的の制度といふものが再び芽を開いた然してそれが商權を其の手に握つて、羅馬法が盛に行はれた、此三つの現象が認められる。是が十字軍

時代までの有樣であります。所が十字軍が起つた、即ち歐羅巴の北部アルプス山の北に居つた澤山の人が、今日のダニューブ河に沿ふ獨逸南部から今日の墺太利を通つて、バルカン地方から小亞細亞へ渡つた。又一部分はダニューブ河の河口から船に乘つて小亞細亞へ行つた。所が十字軍が段々續いて其行路が變じて、アルプス山を南へ踰えて、伊太利の諸港から東地中海を航海して、小亞細亞に渡る樣になつた。其の結果はどうであつたかといふと、伊太利はそれが爲に非常に榮えた。第一伊太利の港には人が來るから伊太利は榮えて金も落る、兎角戰爭をする人は遊ぶ、生命は要らぬ、要らぬから無暗に金を使ふ、隨て其の土地が榮えるのみならず、其の兵隊を送る所の船は皆伊太利人が持つて居つたから、伊太利人は運送の利益を得る。是が近世運送業の發達した原因で、今日運送に關する法律や制度の淵源は遠く伊太利から起つて居る。商業學上海運のことを研究するには決して伊太利を忘れてならぬ。夫から伊太利の港を船出して小亞細亞へ行く、其の船頭は伊太利人で向ふの土地に向つた、それに商賣人などが乘じて向ふへ行つたものだから小亞細亞との關係が出來た。ヴェネチアの如き小亞細亞に大きな殖民地を置くやうになつた。是が即ち現時の殖民地政策の根源となつて居る。是は英吉利が始めたものでも、西班牙が始めたものでもない、それは遠く昔の伊太利の時にヴェネチアが初めたのである。其の次は印度等の貿易が伊太利に盛んに起つた。それは何故か、小亞細亞まで行つて小亞細亞から駱駝に乘つて印度に行く、それが一番捷徑であります。前のやうにダニューブ河に沿うて行かぬでも印度との關係が出來た。所が茲に伊太利に取つて天幸と言ふべきものは、丁度其の時代に當つて土耳其の人が埃及を取つて、今まで歐洲國民は印度に行くに埃及を廻つて遠道して居つたと云ふが、土耳其人と葛藤を開いて仕舞つたから、埃及を通つて行くことが出來ない。即ち印度へ行くには伊太利人の持つて居る殖民地を通つて行くより外に道がない。斯う云ふやうな事情になつた以來伊太利が非常な隆盛を極めた。隨つて伊太利の後ろに國して居る、或は獨逸なり、今日の瑞西なり佛蘭西なりが經濟上では伊太利の配下に立つやうになる。又ダニューブ河が廢れて地中海が起つた、地中海が起つて地中海の船着場たる伊太利が盛んになつたから、伊太利が經濟上歐洲を席卷するやうになり、歐洲の經濟上の權力を握ると同時に、歐洲の政治上の

權力の當時一番强かつたのは伊太利であつた。伊太利の諸市中でヴェネチア、ピザ、アマルフヰ、ラヴェナ、ジェノヴアといふやうな都市が一の獨立國になつて居りまするが、これが皆夫々政治上非常に發達した。隨つて伊太利內部の經濟上の組織が非常に變化を起して、今迄少しも人が氣にしなかつた動產といふものが、經濟上の大勢力として起つた。今まで土地が經濟の土臺であつて、土地がなければ何にも出來ない、所がさう云ふやうにして商業航海が發達したと同時に土地よりも有力なるものが出來た、卽ち動產、金である。土地は持つて居ないでも動產を持つて居れば物持である、隨つて政治上の權力を揮ふことが出來る。今までは土地を持つて居らねば口をきくことは出來ぬ、土地を持つて居らねば勢力が無い。所が動產が大變勢力を得るやうになつた。シチリアあたりで其の時に發達した組織が詰り英吉利あたりへ移つた。斯う云ふ變遷ダニユーブが衰へ地中海が起り、其の結果伊太利が盛んになつた事は、歐洲の政治上の地位、政治上の權力の分配に大變な影響を及ぼした。卽ち伊太利に於けるチユートン人の權力が廢れたのである。伊太利は名は伊太利で實は獨逸國であり、伊太利人の仰ぐ天子は獨逸の天子でありましたが實際獨逸人の天子は勢力を及ぼさなくなつたのであります。斯う云ふやうに伊太利で動產が起り町人が武士に對し頭を揚げるやうになつたといふことは、詰り今日の所謂近世國家の出來始めで、國民經濟が出來、商業國が出來る始めであつた。所が其の伊太利人にコロンボといふ人があつて亞米利加を發見し、其の人と同時にバスコ・デガマといふものが東印度の航路を發見したといふ二つのことがどう云ふ影響を及ぼしたかといふと、伊太利が今日まで持つて居た商業上の優勢を悉く失ふといふ結果を生じた。何故かといふと亞弗利加の南端を廻つて東印度へ行く航路が發見された、卽ち歐羅巴の北から行くにも船を持つて行けば、伊太利人の地を借らぬのみならず、伊太利の殖民地たる小亞細亞を通らぬでも宜い、隨つて伊太利人が儲けた運送上の利益及び其の外の種々の仲繼業の利益は悉く無くなつて仕舞つた。さうして地中海は世界商業の中心で無くなつて仕舞つた。嘗つて無かつた所の亞米利加といふものが大西洋の向岸に發見された、亞米利加は限りの無い富源である、そこからドシドシ銀を載せて歸つて來るからして、隨つて大西洋といふものが世界商業の中心になることは當り前である。暫く伊太利が世界

商業の中心として榮えたが、今度大西洋が商業の舞臺になれば、そこに又代るものが起るのは當り前で、さうして又同じ大西洋に面する國であつても、前に私が言つた色々の羅馬文明の遺物を餘計持つて居つた國民が、先初めに此近世の經濟組織を起す國で無ければならぬ、即ち今日の西班牙丼に葡萄牙であります。是が伊太利に代つて天下の商權を握つた、其の當時天下の政權を握つて歐洲の天下を支配して居つたのは即ち西班牙葡萄牙であります。夫のみならず、總ての文明の進歩はそこにある。即ち學問であれ技術であれ美術であれ或は繪畫彫刻に至るまで、西班牙が大變な盛を極はめ、年々新大陸から持つて來る銀がドシドシ這入つて、西班牙は此の外資輸入に依つて非常な富强になつた。然れば其の西班牙は長く其地位を保ち得たかといふとさうで無い、間もなく衰えたのである。それは何が原因であるか、フェルヂナンド、イサベラの二名君が上に在つた時は宜かつたが、夫れが無くなつてからは、西班牙のやつた經濟政策は悉く間違ひの標本と云つても宜い位馬鹿の數を盡した。其の結果、西班牙は折角得た世界の商權を無くした、其の結果は是まで持つて居つた殖民地は取られ、商權は益々縮み同時に政權が縮む。英吉利の有名な政治家の言の如く死に瀕して居る國民と言はれても、西班牙は怒ることの出來ぬやうになつた。夫に次いで起つたものはどれかといふと和蘭であります。ウエストフアリアの平和は一方に於いては西班牙が世界の政權、商權を失つて仕舞つた暮の鐘を撞くと同時に、和蘭が商權を握る曙の鐘を打つたものであつたのです。和蘭はそれまでは西班牙の領分でありましたが、西班牙に對して獨立の戰爭をして勝つて、ウエストフアリアの平和で獨立が認められた。けれども、經濟上ではもう疾くに西班牙から獨立して居つた、獨立の經濟上の組織を新しい、詰り近世國家の組織にして、中央集權の組織、貨幣經濟、並に金給の役人、金錢の月給を貰つて居る役人の支配して居る行政機關を作つた。ところが和蘭がそれをやるのにどう云ふ風な經濟政策を執つたかといふと、主として伊太利のヴエネチアあたりがやつた經濟政策、殊に殖民政策を眞似して居る。既に殖民政策の根本はヴエネチアにあると言つたが、和蘭は總て其の眞似をして居る。大凡眞似をするといふ事は進歩する原因である。世界の政治史、經濟史を讀むに榮えた國は詰り多くの眞似をして居る。それで眞似の仕方の上手な者は榮え下手なものは衰へる。そこで西

洋の或有名な經濟學者が斯ういふ言を吐いて居る。『政府といふものは經濟政策の上に於ては決して新しいことを發明する者では無い若し新しいことを發明すれば、それは眞似を新規にする發明丈けである、各國の經濟政策殖民政策商業政策工業政策農業政策といふ者は自然に下から湧いて來たものは格別然らずして働くものは、唯だ眞似を上手にしたものが榮え、下手に眞似たものが衰える、和蘭の榮えたのは上手に眞似たにある』（師ブレンタノ氏の言）そればかりでは無い、和蘭が此の如く榮えて葡萄牙の持つて居た殖民地はブラジル丈けを除けて跡は皆和蘭に歸した。和蘭は日本と貿易を營む迄に手を擴げた。さういふ風にして段々和蘭は澤山の殖民地を持つて居る、げれ共和蘭がさう云ふ發達をして間も無くそれに對する競爭者が二つ起つた。何處であるか、先づ始に來たのが佛蘭西、其の次が英吉利である。佛蘭西はどう云ふ風にして來たかと言ふと、ルイ第十一世から始つた。殊にルイ十四世或はコルベアの熱心なる經濟政策、殖民政策に依つて盛になり、一時非常に榮えた。併し其の佛蘭西の商權といふものは長くは續かぬ。間もなく十八世紀の末葉に至つては英吉利今日の商權は確立疑ふ可らざるものとなつた。ナポレオン戰爭終結以後は此勢は前に比して數十倍した。英吉利が世界の商權を握つたは、卽ち其世界に於ける政權を取る始めであつた、英吉利の商業の盛大なのは久しいものでは無い。時期を切つて言へば、十八世紀の末葉、モウ少し詳く言へば千八百十五年ナポレオンを取つ締めた時からだ、それまでは世界一の商業國では無かつた。さうして英吉利が榮えた所以と、和蘭の榮えた所以と、佛蘭西の榮えた所以とは餘程似て居るところがある。何が似て居るか、一番肝要な點、卽ち中央集權が早く出來た。獨逸のやうな國ではツイ此間まで中央集權は出來なかつた、國が幾つにも分れて居つて卽ち二十六に分れて二十六天子もある。名は違ふが天子樣といふものが澤山ある。それが英吉利や佛蘭西に於ては早く無くなつた。和蘭は殊に都府の國と言つても宜い、アムステルダムは非常に盛であつて、其の商業が發達して居た、社會上一體に世が文明に進歩するのは、商工業が無ければならぬことは分る。何故なれば、百姓は何時までやつても、富は幾らか增すけれ共、其を以て一大飛躍を試むるといふことは無い。商工業があつて初て思ひ切つた進歩をし思ひ切つた經濟上の計劃をやり得る資本と富とを與えるものである。所が和蘭は早くから商

業に從事した、西班牙などは商業に從事したと言はれない、「フヰダルゴ」と云ふ武士がむやみに威張散らし、殖民地を取つ締めて成る可く金でも銀でも持つて來ると云ふ外なかつた。それが和蘭はそれ以外に殖民地も殖民地だけれ共、中間商業なり、自分で拵えたものを商ふといふ、何しろ商賣をやつた。所が佛蘭西の方はどうであるか、コルベア、リシエリユーといふやうなえらい人があつて、經濟上の進歩改良を、御上から人民に無理押附けにして出來上げた。和蘭や英吉利でも經濟上の發達を上から押附けたこともあるが、上に申しました通り、大部分は下から湧いて出た、其の進歩は國民自身の企業心の發達から湧出たもので、自然に經濟の發達の順序を逐うて居る。所が佛蘭西はさうで無い。佛蘭西はコルベアなどの政策に依て、例へば三四段の地位から一足飛に上つた、斯ういふ樣なことになつて居る。えらい大臣なり、えらい政治家があつて國を率ゐれば一時えらくなる併し夫は長持がしない、其の國民が全體に自分から、自然に發達したものでなければ發達しない、其の例は佛蘭西にある。其のコルベアがメルカンチル・システムといふものを盛にやつたけれ共、遂に佛蘭西は長く續かぬで、其の地位を英吉利に讓つた。今日は詰り英吉利が世界の商權を握つて居ると同時に、世界の政權を握つて居る。茲に注意すべきことは、英吉利や和蘭では國家の政權といふものが多く經濟上の利害の上から割出される。國家が一つの政策を極めるには何か實際上の利害が後ろにあつて、詰り英吉利の政府、和蘭の政府と云ふものゝ政權は、經濟上の利益の代表者と言つても宜い。所が佛蘭西に行くと其の性質は反對である。國家の政權と、經濟上の利益と云ふものとは、頗る緣が離れて居る。これが佛蘭西の經濟上の發展と英吉利、和蘭の發展との重もな違ひのある點である。

此の如く政治上の發達と商權の發達とは密接な關係を持つて居ることは分る、それで一番先に發達した國は伊太利で、それから西班牙、夫れから和蘭、一時佛蘭西、それから英吉利、今日は英吉利全盛の時代である。そこで此の英吉利の商權が果して長く續くかどうかといふことは、是は學問上の問題ばかりで無い、實際上の問題であるが、我々は學問上から見るも、屬國商權と申して宜しいか、英吉利に於ては殖民地を率ゐて昔日のメルカンチリズムの孤立自足國家經濟思想の上に立つて、他國との關係を絶つて仕舞はふといふ考

が起つた。そこで此英吉利の商權に對して起つて來たのが、十九世紀になつて起つて、二十世紀になつて勢盛なのは、獨逸と亞米利加であります。獨逸はどうして今日までボンヤリして居つたか、是が經濟史上頗る面白い。獨逸は歐洲の眞ん中に位して、四面皆他の國で圍ふて居る間に立つて、少しも世界商業に關係しなかつた。世界商權の發達史の中に獨逸は抹殺されて仕舞つて居る。元來は獨逸が伊太利を支配し、又十字軍の時までは、歐洲の政權商權を握つて居つたに、十字軍以後、殊に新大陸發見の後は、ツイ此頃までは殆んど勘定に這入なかつた。何故であるか、其の原因を尋ねるに、ホーヘンスタウフエン家の天子が、伊太利に於ける經濟上の發展を理解することが出來ず、動産が起つても此の新經濟勢力の肝要なことを了解することが出來なかつた。其の天子は歴代誰が代つても何時も伊太利を政治權で管轄した。所がこゝに利口な人が出て來た、それは法王である。今日は羅馬教會が伊太利を支配して居るが、其の時分でも大きな一つの帝國見たやうなものを持つて、獨逸の天子より早く伊太利の事情が分つたので、羅馬教會は早く動産即都市と結んで天子と喧嘩した。其の喧嘩は歐羅巴の歴史ではギベリン對ゲルフの戰として知れ渡て居るが、其眞正の原因を確めると、獨逸の天子は飽迄も封建的の考を脱しないで都市を壓制した、是では溜らぬといふて都市が法王と結んで天子と戰ひ、其の結果羅馬法王が勝つて、獨逸帝國が權力を失つた。其の結果今日では羅馬教會が非常な勢力を有する原因でありますそれで近世的國家組織は何れの國も羅馬教會から眞似た事柄である。此の如くに獨逸の天子は時勢を解することが出來ずに居つて、又宰相も平々凡々であつたからさう言ふ結果を生じた。又外に商業上の原因がある、即ち地中海が廢つて大西洋が起つた、地中海の盛んな時分に獨逸は伊太利の後ろになつて居るから伊太利が下がれば獨逸が下がる、英吉利から伊太利へ行くには獨逸を通り、又佛蘭西へ行くにも獨逸を通つた、殊に南獨逸を通つた、所が商權が大西洋に移つたから伊太利が衰えた。斯う云ふ原因で獨逸が中世の頃からズツト通して此の頃まで起らなかつたが、普佛戰爭に勝つてから獨逸帝國が出來た。勿論其の前から獨逸帝國を統一しやうといふ傾向はあつた、或は關税同盟とか云ふものがあつた。それが戰爭で勝つて、獨逸帝國がビスマルクの下に出來た、それの出來たのは詰り獨逸がリナツシアメントの最終の目的たる統一國家并

に國民經濟の建設を終つたのが最も肝要な原因で、近來の獨逸の商工業上の進歩は保護政策の結果だと云ふ人があるが是れは間違つて居る。曾て或有名な經濟行政當局者が歐羅巴へ商業政策の觀察に行つて、獨逸の進歩を見て驚いた、保護政策の結果だから自分の國も保護政策を敷かなくちやならぬと言ふ議論を吐いた、成程皮相的に一見するとさうかも知れぬ。さう言ふ人は其の人ばかりでは無い、日本あたりの新聞雜誌にも見受けるやうである。ちよいと考えて見ると其の樣だが實際さうでは無い。獨逸帝國の起る迄は、國內に幾十の關稅區域があつて極めて入込んだ保護稅を澤山課して居た。處が普魯西國あたりではスタイン、ハルデンベルヒの政策で千八百十二年から以來段々と之れを廢した。千八百七十年代になつて輸入稅は殆んど總て廢されやうとした。然るに茲に千八百七十九年に反動が起つて保護稅を置いた。それから段々と勢が增して、今日は保護に確定した。それは何故さうなつたかといふと、七十年に普佛戰爭があつた、丁度日本が支那と戰爭したあとのやうで、獨逸の經濟狀態は物價が騰貴し、勞働の賃銀が高くなり、同時に資本の利子が下がつたから無暗に新らしい工業が出來た、あつちにも會社、こつちにも銀行或は製造所といふので續々出來た。所がこれは長く續くべきもので無いから、日本でもあつた樣に恐慌があつて、皆潰れかゝつたから、潰しては大變だどうか保護しなければならぬといふ譯で保護法が始まつた。所が人間は成るべく懷手して暮して居られゝば、其の方がよいから、政府が保護して、外國の競爭を杜絕すれば其の人々は續けて保護を要求することになる。更に此頃ビユローといふ人の內閣になつてから、前のカブリヴヰの取つた緩和政策を變じ樣として居る。先づ世界の商業經濟政策の大勢は一寸見ると如何にも保護政策であるかの如く見える。又英吉利の帝國主義の商業政策も恰も保護政策の如く見える。又他方には世界の商權を占めて居る亞米利加合衆國が矢張り亂暴な保護政策を執るといふが、是が果して長く續くものかどうかといふことは、今まで述べ來つた歷史で凡そ類推は附く。卽何れも新案でない、何れも皆眞似をして居る。其の眞似が果して上手であるか、又は下手に眞似て居るかが、其國の商權の消長を支配するといふことであります。

右一文三十四年十月東京商業學校に於ける講演の筆記にして言辭不備見るに堪へずと雖

F. VI, 141.

も姑く鶏肋を惜みて茲に收錄す。蓋し予が公けの集會に於て試みたる第一の發言として、商政史の大要を述べたるものなり。